

学位論文題名

所有と分配：平等分配規範の社会関係的基盤に関する  
理論的および実証的研究

学位論文内容の要旨

本論文は、社会科学の中心問題の1つである「分配の公正」について、その規範としての成立可能性を、適応論的・進化論的な観点から理論的・実証的に検討した論文である。論文の構成は以下の通りである。

序文

第1章 公正な分配とは？

- 1.1 公正な分配とは何か？
- 1.2 規範成立のメカニズムをめぐる議論
- 1.3 まとめ

第2章 平等原理の優位性－規範としての平等原理－

- 2.1 平等原理の優位性－これまでの知見
- 2.2 規範としての平等原理
- 2.3 考察

第3章 平等分配規範の社会関係的基盤

－進化ゲームによる理論的分析－

- 3.1 共同分配システムの成立基盤－従来のアプローチ
- 3.2 共同分配規範の進化ゲーム
- 3.3 フリーライダー問題の解決は可能か？
- 3.4 考察

第4章 平等分配規範の成立－実験的検討

- 4.1 資源入手に伴う不確実性が分配行動に及ぼす影響
- 4.2 第1・2実験
- 4.3 第3・4実験
- 4.4 第5実験
- 4.5 考察

第5章 考察

- 5.1 分配規範の社会関係的基盤
- 5.2 仮説演繹ツールとしての進化ゲーム分析
- 5.3 メタ理論としての適応

引用文献

Appendix

序文では、本論文の扱う問題が明示される。その問題とは、進化論的な観点からすれば「利己性」を備えざるを得ないヒトの社会に、なぜ「社会的分配規範」が安定して成立し得るのかという問いである。人間は、時に自己利益に反してまで、ある特定の分配原理に従い、しかもその原理を維持するために逸脱者を罰することを厭わない。つまり、人間社会には分配原理が「規範」ないしは「正義」として存在している。ヒトのもつ利己性を所与としたとき、こうした分配正義の存在はどのように説明されるのか、本論文は「複雑な社会的相互依存関係における適応」という観点からこの問いに接近しようとする。

第1章では、過去の分配公正研究が社会心理学の知見を中心にレビューされる。ここでは、本研究の問いを構成する、分配における自己中心的バイアス（利己性）と正義・規範としての分配原理の作動という2つの一見相反する要素が人間社会に併存して観察されるという基礎事実を、実証データを中心に論じている。さらにこの基礎事実について従来行われてきたさまざまな説明の論理的な問題点を指摘する。

第2章では、本論文の問いのモデルケースとしてとくに平等原理を取り上げ、その社会規範としての特徴を論じている。過去の研究知見は、望ましいとされるいくつかの分配原理の中でも、とくに平等原理がさまざまな場面でヒューリスティックとして発動しやすく、また人々にも「公正な原理」として受け入れられやすいことを示唆している。本論文では、平等原理が「分配の第一原理」としての特徴をもつという上記のポイントを論じた上で、この議論を経験的に例証する社会的ジレンマ実験を報告する。この実験では、通常解決が困難とされる社会的ジレンマが、平等原理が破られた場合には比較的容易に解決できるという重要な経験的知見を示している。

続く第3章では、本論文のもっとも重要な貢献である、「共同分配規範」の進化ゲームモデルが展開される。ここではまず、パラグアイのアチェ族を含む多くの狩猟採集社会において、狩猟資源が採集資源と比べ家族・近親者を越えた部族全体での幅広い共同分配の対象となりやすいという人類学の知見がレビューされる。平等を原則とする共同分配規範がなぜ社会的に成立するのかについては、「リスク分散説」、「容認された窃盗説」を含むいくつかの説明が、人類学の中で提出されてきた。本研究ではこうした従来の説明がフリーライダー問題をはじめとする重要な理論的欠陥をもつことを指摘した上で、メイナード=スミスのタカーハトゲームを拡張した進化ゲームモデルを提出する。このモデルは、ヒトの利己性を所与とした上で、共同分配規範が安定して社会に成立し得る条件を数理的に解析する。一連の数理解析とコンピュータ・シミュレーションを通じて、不確実性の高い環境下では共同分配規範が「個人にとって適応的な制度」として自生し得ることが理論的に示された。また、この分析からいくつかの経験的にテスト可能な命題が導かれている。

第4章は、第3章の進化ゲームモデルの展開から導出された命題を、一連の心理学実験を通じて経験的に検証する。これらの心理学実験は、平等型の共同分配規範に沿った認知・行動が不確実状況下でヒューリスティックとして発動しやすいという事実を、日米比較を含む体系的な検討により丹念に示している。

最後の第5章では、本研究で行った進化ゲーム分析が、共同分配規範の成立可能性という具体的な問題を超えて、「社会規範」という概念を定式化する上で一般的に極めて有効であることを論じる。さらに、こうしたアプローチが、理論的な仮説演繹装置として機能し経験的検証の可能な豊かな命題群を生み出すという、研究戦略上の意味を論じている。

以上、本論文では、分配公正に関する文献のレビュー、平等分配規範の成立可能性に関する理論的考察、人類学の知見を出発点とする進化ゲームモデルの構築、そこから導かれた理論的命題の経験的検討という4つの柱を軸に、論理構成の明快な議論が有機的に展開されている。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 亀 田 達 也  
副 査 助 教 授 野 宮 大 志 郎  
副 査 講 師 結 城 雅 樹

学 位 論 文 題 名

## 所有と分配：平等分配規範の社会関係的基盤に関する 理論的および実証的研究

本論文は、経済学・生物学を中心に、社会科学の諸領域で近年急速に興隆しつつある進化ゲーム論(Maynard Smith, 1982; Gintis, 2000)の枠組みに立脚しながら、基礎社会において特徴的とされる「共同分配規範」の成立可能性を理論的・実証的に検討したものである。

本論文では、分配場面における代表原理である平等分配に着目し、平等分配原理がいわば「分配の第一原理」として多くの場面で自動的に発動しやすいことを、人類学・社会心理学を含む過去の研究のレビューと、新たな社会的ジレンマ実験に基づきまず論証する。その上で、平等原理がなぜ分配の第一原理としての性格を獲得するのかについて、いくつかの説明可能性を論考した後、本論文の立脚する進化ゲーム論の視点を導入する。ここでは、Maynard Smith のタカーハートゲームを理論的に拡張した新たなゲームモデルを提唱し、資源の獲得が不確実な基礎社会において、平等分配型の「共同分配規範」が進化的に安定な形で成立し得ることを数理解析と、コンピュータ・シミュレーションにより示した。次に、本論文では、これらの理論解析から導かれた命題を、一連の心理学実験を通じて経験的に検証している。最後に、本研究の立脚する適応論の考え方が、社会科学・生物科学における強力なメタ理論として役立つことを論じている。

本論文の審査にあたっては、上述の担当者からなる審査委員会を以下の通り開催した。

### 第1回（平成12年9月1日）

申請論文のコピーを1部ずつ委員に配布し、各自で以下の点を検討することとする。

・論文の内容と構成 ・理論モデルの妥当性 ・実証的検討の妥当性

### 第2回（平成12年11月21日）

各委員が申請論文の成果と疑問点を指摘し、口述試験において質問すべきことを整理する。

### 第3回（平成13年1月11日）

申請者の口述試験

第4回（平成13年1月11日）

口述試験の内容を検討し、学位授与の可否を判定する。

第5回（平成13年1月15日）

主査が報告書の原案を作成し、委員会で検討する。

これらの検討を通じて、当委員会では、本論文が、分配公正に関する文献のレビュー、平等分配規範の成立可能性に関する理論的考察、人類学の知見を出発点とする進化ゲームモデルの構築、そこから導かれた理論的命題の経験的検討という4つの柱を軸に、論理構成の明快な議論が有機的に展開されている点を高く評価するに至った。付言すれば、本論文のもととなった研究の一部は既に学会誌に公刊されており、2000年度日本認知科学会優秀論文賞、2000年度日本グループ・ダイナミクス学会優秀論文賞をそれぞれ授けられている。こうした外部評価からも分かるように、本論文は社会科学の広範な領域にわたって、非常に重要な理論的・経験的貢献を行っているとは判断できる。

以上、学位授与に関する審査所見をまとめると、本論文の博士論文としての完成度、および、その学問的貢献は極めて高く評価される。以上の理由から、本論文が学位授与に十分価値する学問的価値を有するものと一致して判断する。